

新聞と未来 開こう

NIE全国大会 最終日



速報



Newspaper in Education

発行所
HOKOHOKO NEWS編集部
NIE全国大会
名古屋大会

名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開かれている「第二十二回NIE全国大会名古屋大会」(日本新聞協会主催、愛知県NIE推進協議会、中日新聞社主管理)の二日目は四日、県内の小中高生が参加する公開授業や教員による実践発表、特別分科会など、計二十六のプログラムがあった。

各会場では、教員が児童生徒と取り組んできた新聞を活用した授業などを発表。特別分科会では、外国籍の子ども

実践発表や分科会 多彩に

会見形式の授業 金城学院高紹介

実践発表では、金城学院高(名古屋市)の武岡基教諭が「苦しいときの『紙』頼み」授業の可能性をひろく新聞活用」をテーマに、三年生十二人と授業の取り組みを紹介した。代表生徒が新聞切り抜き作品を発表した後、記者会見形式で、他の生徒が質問を投げかけた。



①新聞切り抜き作品を実践発表で説明する金城学院高生ら(青木咲弥佳撮影)
②特別分科会「主権者教育とNIE」で発表する登壇者ら(畑山巨撮影)＝いずれも名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で



授業は武岡教諭が名付けた「POSTER-Q(ポスターキー)」という方法。発表を注意深く聞いてもらうのが狙いだ。二人一組のチーム

となり、発表と質疑応答の後、他の生徒が発表内容や質問への対応など五項目を審査する。

今回は生徒二人が少年犯罪をテーマにした作品をスライドで説明。他の生徒からは「暴力をなくすために私たち

ができることは何か」などの質問があった。飛び入りで本紙の高校生記者二人も参加した。

発表後に武岡教諭は、過去にこの授業を受けた卒業生を対象にしたアンケート結果を公表。就職活動に役立つとい

う声が多かったことなど一定の効果があつたことを示した。代表で登壇した金城学院大二年浦田梨沙さんは、自分を表現する力がついたことに触れ、「新聞活用は一生役に立つと思う」と感想を述べた。(奥野郁子)

主権者教育への新聞活用発表

特別分科会の一つ「主権者教育とNIE」では、小中高で主権者教育に取り組む教諭らが登壇。児童生徒の発達段階に応じて、どのように新聞を活用しながら主権者意識を育んでいくかについて意見交換が行われた。

三重県NIE推進協議会会長の山根栄次・三重大名基督教がコーディネーターを務



開会式の司会を務める(左から)西山さん、吉田さん、磯谷さん＝畑山巨撮影

大会を支えた高校生

城大付属、金城学院の五校の延べ百三十人の生徒たち。来場者を各会場に案内したり、分科会の会場設営や資料配付をしたりした。

金城学院高放送部二年の磯谷みずほさんと西山みづきさん、吉田彩夏さんの三人は初日、開会式や記念講演などの司会を務めた。二日前から打ち合わせを重ねてきたといい、「いざ舞台上に立つたら緊張しなかった」と吉田さん。磯谷さんは「初めての全国大会という大舞台で貴重な体験ができた」と話し、西山さんは「大会を支える側だったが、たくさんの人に支えられた」と振り返った。最終日の四日は、閉会式を担当する。

同県一宮市今伊勢中・駒井佑美教諭 新聞の利点は自分たちが聞くことができない現場の「生の声」が分かる点だと思ふ。社会科学の授業は一方的になりがちだが、新聞を用いることで生徒が主体となる授業に変えたい。

案内や設営、司会…力を発揮

同県西尾市西尾小・早川奈見教諭 文章を書くときにはたとえを交えると相手により分かりやすく伝えられると気付いた。記事を使い子どもたちに身近な表現の大切さを教えていきたい。

福井県美浜町美浜西小・平城慶彦教諭 名古屋大会は来場者が多く、NIEの意識が高まっているように感じた。家庭でも親子で新聞を読むように呼びかけていきたい。

同県越前市味真野小・無量小路宗洋教諭 学校の朝の活動や親子で作る新聞など、子どもたちが新聞を毎日手にし、日常で楽しめるような力リキユラムを考えたい。

した。今回は東日本大震災からの復興が進む岩手県盛岡市で、「新聞と歩む 復興、未来へ」を大会スローガンに開かれる。

愛知県安城市桜林小・稲垣淳美教諭 新聞に興味を持つかどころか小さいころからの学校体制を整えたい。

積み重ねだと考えている。学年単位でのNIE活動が行える学校体制を整えたい。

同県一宮市今伊勢中・駒井佑美教諭 新聞の利点は自分たちが聞くことができない現場の「生の声」が分かる点だと思ふ。社会科学の授業は一方的になりがちだが、新聞を用いることで生徒が主体となる授業に変えたい。

同県西尾市西尾小・早川奈見教諭 文章を書くときにはたとえを交えると相手により分かりやすく伝えられると気付いた。記事を使い子どもたちに身近な表現の大切さを教えていきたい。

福井県美浜町美浜西小・平城慶彦教諭 名古屋大会は来場者が多く、NIEの意識が高まっているように感じた。家庭でも親子で新聞を読むように呼びかけていきたい。

同県越前市味真野小・無量小路宗洋教諭 学校の朝の活動や親子で作る新聞など、子どもたちが新聞を毎日手にし、日常で楽しめるような力リキユラムを考えたい。



世界から新聞が消えたら、この世界はどう変わるだろうか。世界初の週刊新聞がフランス・ストラスブールの製本職人ヨハン・カルロスによって作られたのは一六〇五年。それから四百年、新聞は日常生活で空気のように当たり前に存在するようになった。しかし、若者を中心にネットニュースが普及し、新聞離れが加速している。ネットやテレビのニュースだけで十分との声も耳にする。新聞が消えても世界に大きな変化は起きないだろうか▼「新聞なき政府か、政府なき新聞か、そのどちらかを選ばなければならぬ」としたら、私は一瞬のためらいもなく後者を選ぶであろう」と言ったのは米国の元大統領トマス・シェフアン。新聞は権力を監視、抑制できる数少ない存在であり、新聞が消えれば政府の暴走を防ぐことができなくなるのではなか▼新聞は私たちの視野を広く豊かにもしてくれる。紙面をめくると、思わず記事に出合えたり、新しい発見があったりする。ネットにはない特性だ。米国の説教者「新聞は一般庶民の教授である」と言ったという。新聞という名の私たちの「教授は、毎朝規則正しく家を訪れ、ニュースや社会事情、スポーツや地元のちよっとした話題などさまざまな分野について丁寧に講義してくれる。大きな出来事があったときは時間に限らず号外という「特別講義」も。ちよっぴり堅いけど、面白い教授だ。そんな教授には消えてほしくない。ずっと長生きしてほしい。(坪井佑介)



ホコホコNEWS編集部座談会

それでも、僕らが新聞を読むワケ。

ネットやSNSなどで情報を簡単に得られる時代だ。ホコホコNEWS編集部が高校生五百人に実施したアンケートⅡ1号に詳細Ⅱでは、約半数が「新聞を全く読まない」と答えた。このまま新聞が世界から消えたなら、どんな社会になるだろう。編集部の高校生記者八人が「それでも、僕らが新聞を読むワケ。」を考えた。(酒井風)

高校生活は多忙だ。定期試験や大学受験のための勉強に部活動、友人や恋人との人間関係を保つためのメールやSNSでのコミュニケーション。今をときめく十代にとって新聞は大して重要なアイテムではない。陸上部に所属する安達晴紀記者(高2)は「帰宅は夜十時すぎ。何かをする時間を削ってまで新聞を読みたいとは思わない」とぶつちやけた。せいぜい月に一度、家のリビングにある新聞を手取る程度という。

でも新聞という世の中の出来事を伝えるメディアがなくなってしまうたら世界はどうなるだろう。そもそも社会は情報が誰かに伝わることで発展してきたらうから、より原始的な生活に戻る可能性がある。小杉菜々伽記者(高2)は「伝言ゲームのように話がすり替わり、デマが広がるのでは。何が真実か分からない世の中になると思っています」。



未来、探したい

三浦明香(高2)



地元知らんで、どーすんの？

市川慎太郎(高2)



新聞、我らの問題文

安達晴紀(高2)



大人になんて任せられない！

大矢裕花(高2)



高校生だって社会に貢献したい

神原歌徳(高3)



真実が知りたい

小杉菜々伽(高2)

「新聞を読むのだから。」「天気を知りたいから」「今夜のテレビ番組が気になる」「スポーツ大会で同級生が入賞した」。記者八人で意見を交わすと、答えは人それぞれ違った。

地元・愛知県豊橋市の地方紙がお気に入りの市川慎太郎記者(高2)は、週末は朝起きると自宅近くのミスタードーナツへ新聞を携えて向かう。いつものカフェオレ(おかわり自由)を片手に、地域でどんなイベントがあるのか、ボランティアなど自分が参加できることはないかと、記事に目を通す。「高校生の僕でも地域に貢献したいって思っから」。

月に一度しか新聞を開かない安達記者も、実は関心をもって読むことはある。紙面をめぐれば、世界のニュースを扱う国際面に目を留める。将来の夢は外交官。「いまだ解決していない領土問題がある。世界の人々が仲良く暮らすにはどうしたらよいかを考えたい」。

■ 普段の授業で私たちが取り組んでいることの多くは、「答えのある問題」だ。学校や塾で解き方を誰かから習い、訓練する。これまでは

通用したかもしれない。でも、時代は変わりつつある。人工知能(AI)の発達やグローバル化で、歴史ある大企業でも存在が危ぶまれ、「本場に良いもの」だけが残る時代になった。私たちに必要なのは「答えのある問題」ではなく、「未だ答えが出ていない問題」に挑み、解決策を考え、提案することではないか。

高校生の約半数が新聞を「全く読まない」と答えたが、残りの約半数は、少なくとも月一回以上は新聞を読んでいる。学校の勉強では得られない、本当に自分が欲する情報を見つけ、この現代をつかみ取り、将来の自分に生かす。つまり僕らは「今を知り、未来をつくるため」に新聞を読む。

日本の高校生が自発的に、自分からより確かな情報を基に物事を考えようとしているのなら、これほど誇らしいことはない。そんな高校生がもっと増えたら、どんな未来になるだろう。

畑山巨撮影

愛知県明和高二年三浦歩(一号表面) 今回のこの新聞の制作に携わり、毎朝当たり前のように届いている新聞がたくさんの人の力の結晶なんだと改めて感じる事ができました。

愛知・中京大中高三年安田悠里子(一号裏面兼遊軍) 教育に新聞を取り入れることで、多くの高校生にインターネットとは違った新聞の良さを知ってもらいたいと思いました。

愛知・南山国際高三年板垣杏奈(二号表面) 自分の好きな世界が無限に広がるのがネット、知らない世界が広がるのが新聞だと感じた。将来の夢を見つけるためにも、中高生はもっと新聞を開こう！

三重・晩高三年西尾七海(二号裏面) 高校生という立場から「教育と新聞」について考えることも良い機会になった。簡単ではないが、ぜひ全国の学校に広まってほしい。

愛知県西春高三年水谷文香(三号表面) 取材した先生の意図を的確に読み取り、限られた字数で記事を書くことが難しかった。紙面に記事が載った時の喜びはとても大きかった。

愛知県一宮高二年安達晴紀(三号裏面) 僕自身新聞読まぬ人だったし、かし議論をする中で新聞の良さに気付いた。今僕らには、新聞を読むことで社会を知ることが重要なのだと感じた。

愛知県新川高三年青木咲弥佳(写真) 私たちの新聞はいかがでしたか。みんなで作成した号外に感動！新聞をより身近に感じることができ、とても良い体験ができました。

編集後記